

パラドックス戦争 上

デフコン3

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	9
第一章 通り魔	22
第二章 オーバー・テクノロジ	40
第三章 襲撃	71
第四章 ロボット	98
第五章 コロツサス	124
第六章 誘拐	152
第七章 亜空間	178
第八章 地球爆破作戦	206
エピローグ	217

登場人物紹介

////【日本】////

●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

ともんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

はら だたくみ
原田拓海 三佐。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだはるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐらしんた
田口心太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだいき
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

かんあやか
姜彩夏 二佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

うるしぼらたけとみ
漆原武富 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。分隊長。部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

いいかける
井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

（訓練小隊）

あまひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。コードネーム：コブラ・アイス。

かがみしげふみ
各務成文 三曹。新人隊員。母校の大学レスリング部の教育補助要員。

コードネーム：フォール。

みねさやか
峰沙也加 三曹。新人隊員。特技は山登りとトライアスロン。コードネーム：ケーター。

はなわびれい
花輪美麗 三曹。新人隊員。北京語遣い。母は台湾出身。コードネーム：タオ。

こまとりあや
駒鳥綾 三曹。新人隊員。特技は護身術。コードネーム：レスラー。

^{せじまかや}
瀬島果耶 士長。新人隊員。“本業”はコスプレイヤー。コードネーム：
アーチ。

《水陸機動団》

^{しはひかる}
司馬光 一佐。水機団の格闘技教官兼北京語講師。

●航空自衛隊

・航空支援集団

《第一輸送航空隊》

^{べっぶかつひこ}
別府克彦 空自一佐。副司令。

●神奈川県警

^{かきもとすみえ}
柿本君恵 警視正。警察庁サイバー犯罪対策班班長。

^{さどけん}
佐渡賢 警部。青葉署署長時代の柿本の部下。

●某大学

^{あねがわゆうすけ}
姉川祐介 教授。専門は生体工学。柿本の大学時代の恩師。

^{みはらまさひと}
三原賢人 准教授。BMI（プレイン・マシン・インタフェース）の新
鋭、電子光学と生物学の博士号を持つ。

●その他

^{はらだもえ} ^{コンチナ}
原田萌 原田の妻。旧姓名は、孔娜娜／榎田萌。専業主婦だが、実は
天才科学者。

^{クオン}
剛 ベトナム人の男の子。

////【中国】////

●遼寧省人民警察東京出張署

^{ヂェウバオロン}
周宝竜 一級警督（警部）。署長。半年前に来日。

●人材スカウト会社

^{ホーウーハン}
賀宇航 博士。精華大学出身の理学博士。

//// [アメリカ] ////

●空軍

トミー・マックスウェル 空軍大佐。魔術師^{ソーサラー}ヴァイオレットとは旧知。

●海軍

レベッカ・カーソン 海軍少佐。魔術師^{ソーサラー}ヴァイオレットの秘書で、戦闘機パイロット。

●国家安全保障局言語学研究所

サラ・ミア・シェパード 博士。AI言語学者。

●エネルギー省ペンタゴン調整局

魔術師^{ソーサラー}ヴァイオレット ミッション・リーダー。本名不詳。左腕に義手。“六〇〇万ドルの腕を持つ女”の異名を持つ。

//// [火星] ////

カーバ・シン 博士。ミッション・コマンダー。

アラン・ヨー 博士。メカニック・ディレクター。

リディ・ラル 博士。パイロット。進化生物が専門。医師の博士号も持つ。

アナトール・コバール 博士。パイロット。元はエジプト文明とマヤ文明を専門にする考古学者。

パ
ラ
ド
ク
ス
戦
争
上
デ
フ
コ
ン
3

プロローグ

窓の外に、荒涼とした赤い景色が広がっていた。緑は無く、山も無い。遠くに丘があるはずだったが、日中起こった砂塵のせいで今は見えない。

それは、一見すると窓だ。だがそれは窓ではなく、高精度のモニターだった。外は放射線が強く、断熱のためにも、窓を作るような余裕はなかった。そこに映し出されている景色は、屋根に設けたカメラからのライブ映像だ。

二人のパイロットは、その代わり映えのしない外の景色を眺めながら、すでに二時間待機していた。

その狭い部屋の話は、コクピットと呼ばれて

いた。操縦に集中できるような、わざと狭く作ってある。防音構造だが、エアコンの音は少しうるさい。

操縦席にジョイスティック型の操縦装置もあるにはあるが、実際に使われることはない。そして彼らパイロットは飛ぶのではなく、ダイブ——、潜る、とその作業を呼んでいた。

事故に備えて、宇宙服を着てリクライニングシートに座る二人のパイロットは、アームスタンドのモニターに作業スケジュールを呼び出して手順を再確認していた。

これから二人のパイロットが行う作業は、人類

初の月面着陸に匹敵する偉業と位置づけられている。遅延は許されなかったが、そもそもが、この作業自体、予定より三年も遅れているのだ。

長い年月を費やし、全てが、この日のために用意された。ロゼッタ溪谷から五マイルの位置にまず研究用のベース・キャンプ「サイト・α」が設けられた。二〇〇トンを超える資材がわざわざ地球から運ばれてきた。

その施設の建設だけで、三〇体の建設用ロボットを使って二年も要した。

ベース・キャンプが完成する前に、ロゼッタ溪谷の深さ二〇〇メートルの底までドローンを降ろし、ミューオン他を使つての内部構造の調査が始められた。

コールド・トラップと呼ばれる凍り付いた地面が、溪谷の底にあった。

溪谷の下まで降りるエレベータが地上との間に

建設された。発見されたその横穴の出入口は、ヘブンズゲートと名付けられていたが、そのハッチの外に、エアロック1、エアロック2と名付けたアプローチ用ルームも建設した。

地上でも遺跡の搜索が続けられたが、芳しい成果はない。だがどこかに彼ら遺跡の持ち主たちの足跡があるものと信じて、それは今もまだ続いていた。

コクピットは、そのサイト・αの一角に設けられていた。

メカニック・ディレクターのアラン・ヨー博士が、二人のパイロットの前で「冗談じゃない……」と小声で漏らした。

「これでは、作業終了時刻が二時間は延びることになる。一〇年も準備してこれか……」

間もなく、火星特有の青い夕焼けがやってくる。すでにマイナー・トラブルのせいで、作業開始が

押しまくっていた。発射台に据え付けられた宇宙ロケットの発射時刻が延びるようなものだ。これ以上延びるようなら、いったん作業を中止し、日を変えてまたスケジュールを再設定する必要が出てくるだろう。

通信が入り、部屋の中央に、マーズ・コントロールのミッシヨン・コマンドー、カーバ・シン博士の顔が浮かび上がった。

マーズ・コントロールは、火星初の街、ガリレオ・シテイにある。生成物^{レゴリス}で作られた半地下の地上施設だった。

シン博士の映像はホロ映像だが、それほど生々しくはない。せいぜい微表情をつかめるという程度の解像度だ。本物の彼は、白髪が目立つが、この生首は薄い緑色の単色表示だ。だが、彼の声はその空中に浮かび上がる生首から聞こえてくる。

「すまなかった。地球側の、カンパニーの用意が

出来たようだ。彼らは、エンジニアでも科学者でもない。政治家というものは、いつの時代もルーズなものだ。パイロットは問題ないね？」

「ケーブ・チーム全作業員をレベル0まで撤収させる。すぐエレベーターで上がってくれ」

ヨー博士が、溪谷の底で待機していたチームに撤収を命じた。

二人のパイロットは、問題ないという印に、右手の親指を立てて見せた。もう何十回とコミュニケーションした。訓練は完璧。あとは、実際にそこにいくだけの話だ。

「地球では今、君たち二人の経歴を紹介しているよ。初の人類火星着陸時以来だろう、こんなビッグ・イベントは。どんな不測の事態が発生するかわからないので、生中継こそないが、映像はカンパニーの了解を得て、ただちに公開されることになっている」

「シン博士。スケジュールを進めていいですか？」とヨー博士が急かした。

「もちろんだ。ヘブンスゲートを破壊してくれ」

ヘブンスゲートが発見されたのは偶然だった。

渓谷の下に眠っているはずの氷床を調査していたドローンが、渓谷の底から、崖の奥へと開いた空間を発見した。最初それは、月でも見られるありきたりな溶岩チューブだろうと思われた。

月でも火星でも、人類はそこを居住スペースとして利用している。降り注ぐ隕石や宇宙放射線から身を守るからだ。

だが、そのトンネルには出入口は無かった。それも不思議なことではない。長年の間に、崩落や何やらで、かつてはあった入り口が塞がれたのだろう。

状況が変わったのは、氷床の在処を探るための音響探査を開始してからだった。周囲の岩壁とは

違う物質で作られた、幾何学的な形状が浮かび上がった。誰かが、そこに人工的な壁を作っていた。人工的なドアがそのチューブの中にあつた。そこはエアロック構造のようにも見え、さらに調査が進むにつれ、横穴の中に、何かのエネルギーが生していることも確認された。

これらが判明するまで五年間が費やされた。カンパニーは、そのロゼッタ渓谷の何かを、異文明の遺跡と判断し、ベース・キャンプを設営しつつ、科学的調査の方法を探った。

最初に出た案は、真上からその空間に向かってボーリングし、穴からドローンを入れて内部調査するというアイディアだった。

しかし、その穴の真下に何かの重要な機械や文明遺産があつた場合、破壊しかねないということになって却下された。

ふつうにハッチらしき場所を開けることは出来

ないのか？ と可能性が探られたが、長年の経年劣化のせいで、ハッチ外側にあつただろう構造物はすでに風化脱落し、取り付くことは出来なかつた。

ちなみに、推定されるその知的生命体の身長や大きさは、人類と同等であろうと推測された。そして、その空間のハッチが作られたのは、レゴリスによる軽質セラミックで出来たハッチの風化の程度から推測して、今から二、三千年前後の昔ではないかと思われていた。太陽系の歴史からすれば、ごくごく最近のことだ。

つまり、その頃動いていた、何かの動力源が、今もまだエネルギーを持っているのだ。

ハッチは、火星のレゴリスで生産された軽質セラミックで出来ていた。

そのヘブンズゲートのハッチ部分に、今は覆い被さるように工作機械の装置がはめ込んである。

ヨー博士の指示を受け、ハッチ部分、すなわち「ヘブンズゲート」の破壊作業が始められた。

まず直径一センチのドリルでハッチに穴を開けてエアロックの中を探った。気圧を測り、続いてレーザーがハッチを切っていく。だが最後は、ロボット・アームのメカニカル・カッターで壁を慎重にくりぬいた。

破壊したハッチを手前に引き抜くと、ドローンが前進して、内部の映像を送って寄越す。間違いなくエアロックだ。ガラス窓や、内側のハッチを開けるレバーもある。だが、文字のようなものはまだどこにも無かった。

ガラス窓と思しき部分は、長年の劣化ですすけていた。窓の向こうは全く見えない。

ハッチのドア部分は、幅一五〇センチ。高さも二メートルほどだ。地球人なら、宇宙服を着て、自由に出入りできる十分な大きさだ。

向こうの気圧がわからないので、ここでも、ドリルでまず穴を開けた。気圧は外と変わらず、大気成分が即座に分析されたが、それも外と変わらない。恐らくこれも風化が原因だろう。

ミッシヨン・コントロールで見守っていたエンジニアたちが、外部と空気交換するためのパイプ類が見当たらないことに違和感を表明した。ここはガレージではなく、研究や生活空間として利用されたと推測していたからだ。

どこかに露出しているはずのパイプを探して何年も調査が行われたが、その空間から氷床へ降りているパイプ以外の痕跡はまだ見つかっていなかった。

ヨー博士は、二人のパイロットの真正面に立った。

「では、リディ・ラル博士、アナトール・コバール博士。ゴーグルを装着してくれ。デバイスを接

続する」

「これ、別に私たちがジョイスティックで操縦しても同じなのよね……」

とラル博士がぼやきながらゴーグルを受け取った。それは、視覚情報を遮断し、同時に脳波を計測するためのもので、投影装置の類ではなかった。「今ごろ、それを言うのかね……」

とヨー博士が呆れた。

「人類の偉業、新たな地平を切り拓くための作業だ。歴史に残る。二名のパイロットは、最先端の技術を駆使し、完全自立型シンスを手足を動かすことなく操縦してそれを成し遂げたという事実が必要なのだ」

「テスト・パイロットの何人がそれで廃人になりましたっけ？ あれ、不意に回線が切れると目眩めまいがするのよね？」

「戦闘機に人が乗っていた頃の9Gよりはましだ

ろう。あるいは、ヘルメット・ゴーグルとか被って3D酔いで吐きまくっていた頃よりは、格段に改善された」

「彼女の良い所ですよ、博士。場を和ませてくれる」

コバル博士は、ゴーグルを装着する前に、同僚に右手を差し伸べて軽く握手した。

「じゃあ、行きましょう！ 人類のファースト・コンタクトへ——」

頭蓋内に埋め込まれた非接触型センサーとデバイスが同調すると、地下プラットホームに置かれた人型ロボット二体が起動した。

ヨー博士は、コクピットを出て隣の管制室へと移り、ヘッドセットを被った。

「シンクロ率上昇中、ラル博士は九五パーセント、コバル博士は、八九パーセント。悪くない。支障は無いだろう。特に、このプレッシャー下で、

九五パーセントものシンクロ率を叩き出すラル博士はたいしたものだ」

「私、セクサロイドのパイロットにはなれないわね。あの人たち、一〇二パーセントとかシンクロ率が行くらしいから」

「それはシステム上ありえないな。九九パーセントが限界値だ。それを越えたらただの詐欺か、エスパーということになる。動いてくれ」

二人のパイロットは、二体のロボットが置かれたケーシングから上体を起こした。少し腹筋に力を入れると、簡単にそれは起き上がった。

その人型ロボットのことは、シンズグと呼ばれていた。語源はよくわからない。前世紀以前のゲームかSF小説の名残だという噂もあったが、最初、人が操縦するロボットは、他の自立型アンドロイドとは完全に区別されていた。

だが、その区別はあつという間に困難になった。

形骸化した。喫茶店で楽しく喋っている相手がロボットなのか、それとも人間が操縦して喋っている。シンスグなのかを判断するのは難しかった。

技術は、あつという間に一線を越え、完全アンドロイドに、時々、生身の人間が入って操縦するようになった。こうなると、シンスとアンドロイドの境目、人間の境目すら怪しくなる。

たとえば、人間として採用されながら、時々、自分とより二つの分身を登校させる教師が始めた。アンドロイドの教師は、主人の癖や語り口、性格を完璧に模倣し、教室での授業も完璧にこなした。職員室の人間関係も無難にやり過ごし、夜は、愛してもいない伴侶との営みまで完璧にこなせるまでに進化した。

実際、シンスとの結婚は、今や多くの地域、民族で承認されていた。幸いなのは、シンスはまだ高価で、誰でも買える代物ではないということだ。

だが、人間の労働の九割はシンスで代替できる時代になった。シンスを量産できるビッグ・カンパニーが生まれ、労働の意味が崩壊したことで、国家は解体された。今は、企業連合が地球を治めている。民族紛争は今もある。先進国の暮らしは激変したが、アフリカは相変わらず貧しいままだ。リディ・ラル博士は、コバール博士の前で腕を動かして見せた。

二人が乗り込んだロボットは、世間では「労働者^{レイバー}」と呼ばれるタイプだった。デザインは一九七〇年代風。四肢はほぼ直線で構成され、頭部はいかにもな形で、口は無い。不気味の谷を克服するため、わざとチープなデザインで作られた。もちろんセックスの機能もない。それ以外は、家政婦でも工事現場の高所作業でもやってのける。指も五本ずつある。ただし、服は着ていないし、もちろん靴も履かない。しかし、動くたびギーコ

ギーコとモーター音がすることもなかった。

ポリ・フレームの胴体は、白く塗られている。知的生命体との接触に備えて、左胸の所に地球を模した青いイラストが描かれている。

宇宙服を着た人間がそこにはいないのは、諸々の安全リスクを判断してのことだった。

「マーズ1、異常なし」

「マーズ2も異常なし」

「了解。前進を許可する。ところで君たち、何か

気の利いた台詞は用意してあるだろうね？」

「その瞬間に覚えていたらね……」

エアロックのハッチを開くはずの大きなレバーは、固着状態にあった。どうにか動かそうと試みたが、内部のメカニズムが破壊されていることは疑いようがなかった。

結局これも、レーザーとメカニカル・カッターを使って切断するしかなかった。

破壊してこじ開けたハッチはサンドウィッチ構造になっていて、恐らく放射線を遮るための金属プレートも何層か挟み込まれていた。

ここから先は、ドローンは飛ばさないことになっていた。シンスを使うとは言え、人間が、その目で歩いて直接確認することになっていた。

溶岩チューブの中は、コンクリートで壁と天井が作ってある。幅は、一〇メートルほど。天井の高さは三メートルほどある。

二人のシンスは、視界を確保するためのランタンを置いていきながら前進した。

「少なくともこの異星人は、立方体の概念を持ち、高度な工作技術も持っていたことは事実だな」

と考古学者のコバール博士が言った。もとは、エジプト文明とマヤ文明の研究者だ。ロゼッタ溪谷の大発見以来、この研究に寄り憑かれ、五年前、火星に移住してきた。

部屋の中央に何か崩れた跡がある。水平部分の名残からして、テールだろうと思われた。幅は三メートルほど。奥行きは五メートルほどのテールが崩れた跡だった。

天井には、ライトらしきものが埋め込まれていた跡もある。

ラル博士は、その聖域に入ってから三分ほど経ってようやく口を開いた。

「私は、リデイ・ラル博士です……、人類が、他文明と接触できる日が来るまで生き延びたことに感謝します。そして、彼らがどういう知的生命体であったにしても、この発見が人類の更なる飛躍に貢献してくれることを期待します——」

奥の部屋への隔壁があったが、そこは部屋の天井、構造体を支えるための柱の役割を果たすもので、プライバシーや、何かの目的があつて部屋を分けているものでもなさそうだった。ドアの類い

はなかった。開口部は幅二メートルはある。

「ここにあるものの恐らくほとんど全てがレゴリスから作られている。宇宙船で持ち込まれたものは僅かだろう。宇宙船で来たとすればだが……」

コバール博士が解説しながら前進する。

二人は、第2室へと進んだ。外からのセンサー調査で、学者たちが「棺桶ルーム」と名付けた部屋だった。壁際に、箱形の入れ物が二個タンデムに置いてある。ケール類が床を這った痕跡があった。

箱を構成していた材質は劣化して剝離、破片となつて積もっていたが、その中身はまだ残っていた。元は液体だったはずの物質が、蠟化して残っている。緑色をしていた。

ここからは、進化生物学が専門のラル博士の出番だった。

彼女は、腰のベルトに装着したトライ・コーダ

ーを出してセンサーをその物質に当てた。

「間違いない、元は有機物だわ」

「じゃあ、これは、やっぱり冬眠用のライフポッドの類い？」

「どうかしら？ ミッション・コマンドー？ 上に降り積もっているのは、蓋というかカバールの破片だと思っけれど、取り除いていいかしら？」

「そこにセンサーや操作パネルがあつた形跡は？」

とシン博士が尋ねてきた。

「いえ。無いわね。ここまで来て、文字の名残すら無いわ」

「私に任せてくれ。棺桶の中に崩れ落ちて埋もれた蓋の破片を拾い上げるのは得意なつもりだ」

コバール博士は、一五分ほどその作業に集中し、蠟化した液面の上部を覆っていたゴミを取り除いた。そして、腰のベルトに下げていた刷毛で、埃

を払った。

ランタンの光を当てて、「ほう……」と漏らした。

「ここから先は、リデイの専門だ。場所を譲るよ」

リデイ・ラル博士が身を乗り出し、その物体を上から覗き込み、さらにランタンの角度を変えて観察した。同時にレポートも開始した。

「さあ、こんにちは、宇宙人さん……。蠟化物質は、この有機体の、恐らく顔面の上まで覆っているが、透明度があるため、その下に沈んでいる物体がある程度観察できる。われわれが今、見ているのは、恐らく肩から上の部分で、眼が見えている。両眼構造。臉の有無は不明。ただし、鼻や口は見えない。首もなく、強いて何かに例えるならカエルの頭に似ている。両眼のみセンサーがある。二足歩行体のカエル。肩から下はまだ見えないから二足あるかどうかはまだ不明なれど」

「それで、これは何だと思う？ この液体は、も

とは液体だったのだろうか、棺桶ならこんなものは必要無いよね？」

コバール博士が聞いた。

「そうね……。でも、ライフ・カプセルかどうかはわからない。これから鼻や口が形成される人工子宮の類いだったかも知れないし。これが頭部だとすると、脳の容量も知れている。これが知的生命体だったのか……。単に、生物型ドローンの可能性もあるわ。それを使って宇宙探査していたのかも。変ね。エネルギー反応はここではないわ……」

ラル博士が、トライ・コーダーのモニターを見ながら言った。

「両博士、興味は尽きないが、これは生物班に委ねるとして、奥へと進んでくれ」

ミッション・コマンダーが先を急がせた。

また隔壁がある。ここも中央部分に開口部があ

り、別にドアで隔てられているわけではない。

その第3室にも、テーブルの跡があった。そしてここには、壁際にラックが作られていた。半分は崩落していたが、半分は辛うじてまだ形状を留めている。

「エネルギー反応は、この瓦礫の下からのようね……」

コバール博士が、刷毛の柄部分で、その瓦礫の山を少しずつ崩して行った。

「光ってないか？……」

と博士が手を止めた。そして、近くを照らしていたランタンの灯りをラル博士が消した。その部屋のランタンの光を全て消すと、瓦礫の下で、何かほのあざ灰青く光を放っていることがわかった。

埃の下に何か光るものが埋まっている。

「考古学の世界では、こういうものを触ったり持ち出したりすると、良くないことが起こる……」

「生物発光の類いには見えないわ。取り出してみましょう。どうせこの身体、シンスなんだし。最悪の場合でも、ボディが感電して爆発するだけよ。ヨー博士、触ってみますけどいいですか？」

ヨー博士は、ミツシヨン・コントロールに判断を求めたが、そちらの判断に任すということだった。そもそもが、そういう機械回りのことは、ヨー博士の領分だった。

「慎重に頼むぞ。そして自己責任だ。発光現象は、周囲の塵をイオン化して起きている現象だろう。まだそれなりのエネルギーを蓄積しているとみていい」

「このシンスの両手は絶縁体です。大丈夫でしょう」

ラル博士は、まず上の塵を払おうと、コパール博士から刷毛を受け取ってゴミを綺麗にしようとした。だが、彼女の意識はそこまでだった。

「わっ！ 何これ——」

何かの強烈なイメージを見せられると同時に、彼女のシンクロ率が一二〇パーセントまで跳ね上がり、彼女は意識を喪失した。

第3室での映像は公開されなかった。一〇年間、地球でニュースを待たされ続けた民衆にとっては、第2室で発見された生命体だけで十分だった。世紀の大発見だ。

人類は、遂にファースト・コンタクトを成し遂げた。西暦二〇九九年——、夏の出来事だった。

第一章 通り魔

陸上自衛隊・第1空挺団隊員の各務成文^{かがみしげふみ}三等陸曹は、つい三〇分前の練習試合を頭で反芻しながら歩いてきた。

いつもはユニホームや靴を入れたザックを背負って走っているコースだが、今は、最後の瞬間に油断して首を取られたことを反省していた。

あつてはならないミスだった。しかも相手は学生だ。目を瞑っていても勝てなければならない相手だった。

田園都市線青葉台駅近くの並木道は、緑が生い茂りジョギングするにもウォーキングするにも気持ちいい街だ。東名のインターにも近く、高級住

宅街だそうだが、自分はたぶん、こんな街には一生涯が無いだろうと思った。

スポーツには、体重別の「クラス」がある。人生にも「格」はある。自分は、自分に宛がわれた階級で懸命に戦うのみだ……。

駅に近付くと、歩道にはツツジの生け垣まである。季節を問わずに良い場所だ。

各務が異変に気付いたのは、一人の主婦が、時々後ろを振り返りながらその歩道を走って来た時だった。口をぽかんと開け、青ざめた表情だった。

続いて、ベビーカーを押した母親が、途中で赤

ちゃんを抱きかかえながら走り出す様子が見えた。何かをブツブツ口の中で呟くというか、叫んでいる。だが言葉に出来ない様子だった。

交差点の向こうには高級スーパーがある。誰かの怒鳴り声はその辺りから聞こえてきた。

各務が緩めていたザツクを締め直して走り出そうとした瞬間、乾いた音が二発、パン！パン！——、と聞こえてきた。街中では、たぶん一生に一度として聞くことのないだろう銃声だった。

各務が反射的に駆け出した瞬間、上着から血糊を垂らしたサラリーマンが駆けてくる。「逃げろ！逃げろ！ 通り魔だ！——」と叫んでいた。

あちこちから悲鳴が聞こえてくる。

交差点に突っ込むと、右手にピストルを持った警官と、犯人と思しき男が取っ組み合っていた。

男が持つ刃物の切っ先から、赤い鮮血が、弧を舞うかのように空に飛び散るのが見えた。

各務は、一瞬も躊躇わなかった。男に強烈なタックルを喰らわせた。そのまま男は吹き飛ばされ、ひっくり返るだろうと思った。特に、力を加減したつもりもなかった。

ところが、相手はそのまま耐えて、ほぼ仁王立ちしていた。一瞬、各務は、え？ という気持ちになった。躲された……。自分のようにレスリングでもやっているなら耐えられるかも知れないが、素人が持ち堪えるのはまず無理だった。これは全く、躲されたに等しい。

だが相手は耐えている。全身、誰かの血しぶきで血だらけだった。しかも右手に刃物を握っていた。その刃物は、ナイフとか出刃包丁ではなく、軍隊用のバヨネットだ。警官は微かな呻き声を発しながら、その場に頹れようとしていた。

各務は腰を落とし、相手を睨み付けた。だが、動いたのは相手が先だった。眼が逝っている。正

気には見えない。まるで、何かに操られているような感じだった。

刃物とは戦うな！ が鉄則だ。たとえ特殊部隊といえども。刃物を持つ相手とは距離を取るのが唯一の戦闘方法だ。

だが、この状況では逃げられなかった。一撃くらうことを覚悟してフォールするしかない……。瞬時に押さえ込むしか……。

動いたのは相手が先だったが、無駄のない動きが出来たのは、日頃鍛え抜いている各務が先だった。寸分の隙も無い攻撃が、後にスパーから回収された監視カメラの映像で確認されたが、各務は、相手の右腕が振り下ろされる前にタックルを喰らわせ、敵をひっくり返してフォールに持ち込んだ。

相手はナイフを放そうとしなかったが、そのまま路上にひっくり返った。何かの薬物でもやって

いるのか、相手に痛みを感じている様子はない。拳銃の弾がどこかに命中しているはずだが、それも意に介さない感じだった。

各務は、やむなくそこでレスリングからコンバットに切り替えた。スポーツから軍隊の格闘戦に切り替え、首絞めで頸動脈の血流を遮断して敵を気絶させた。

相手が気を失った所で、右手からバヨネットをもぎ取り、地面に倒れた警官の手錠を借りて後ろ手に縛り上げた。

さっと見渡すだけで四人の人間がその場に倒れている。自分が無事なことを確認した後、ただちにトリアージに掛かったが、いずれも複数箇所を刺されていた。致命傷ばかりだ。

駅前交番から飛び出して応戦したらしい警官は、脇腹から深くバヨネットを突き刺されている。まだ出血は続いているが、どうも動脈は無事そうだ

った。他の一般市民は、たぶん駄目だろう。

犯人は、右胸に一発食らっていた。肺を掠める位置に見えたが、この銃創であるの戦闘力は信じられなかった。

先週、埼玉県川口市で発生した通り魔事件に続いて、最近二件目の通り魔事件だった。一見無敵人間によるこの自殺的凶行が、先週の事件と連携していることがわかるのはすぐだった。

市民三名が即死。格闘して犯人を取り押さえようとしたサラリーマン一人も翌日亡くなり、警官は、各務の処置のお陰で一命を取り留めた。その前の週に発生した川口市の無差別通り魔事件が、一二名もの犠牲者を出したことを思えば、各務が身を挺して救った命は多かった。

その翌々日、神奈川県警の事情聴取を終えた各

務成文三等陸曹は、習志野第一空挺団敷地内にある古ぼけたバラック小屋、第四〇三本部管理中隊の看板が掛けられたみすばらしい小屋の一番奥まった隊長室にいた。

第四〇三本部管理中隊長、その実、特殊作戦群隷下の特殊部隊「サイレント・コア」を率いる土門康平^{どもんこうへい}陸将補は、机の上に広げられた昨日の新聞朝刊のコピー用紙の束を眺めて、まんざらでもない顔で、隊員を見遣っていた。

「非番の自衛隊員、市民を救う！」のヘッドラインが踊っている。夕刊紙には、「市民を救ったのは最強無敵の空挺隊員！」と派手な文字が躍っていた。

「うちの部隊の名前は出してないよね？」

「はい！ 自分はただ、習志野の空挺団員であるとしか証言しておりません。具体的な所属や上官の官姓名は、しかるべきルートで問い合わせせて頂

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。